野菜直売所に集う人びとに関する研究

――売り手が直売所に集う理由――

秋元優美

１．直売所の始まり

青森県津軽地域にある A 町に、この地域に住む「大変行動力のある母さん」たちが組織した野菜の A 直売所がある。

ここには「無人販売所」の看板があるが、実は「無人」ではない。1987 年に設立された当初から、朝 6 時から 8 時半までの間は何人かの売り手がその日の当番として売り場につき、その後朝の間で売れ残った野菜が無人販売される、という仕組みになっている。販売品は規格外の野菜など市場へ出さなかった野菜のほか、直売所で販売するために栽培された野菜や加工品もある。朝の有人販売の間は、50 人以上もの客が訪れ、その日出荷された野菜の 8 割近くが売れてしまう。売り手と買い手同士が冗談を交えながらおしゃべりをして、にぎやかである（写真１）。

写真１　にぎわう直売所（2008 年 7 月 6 日撮影）

２．研究目的と方法・対象

本研究では､ここに集う人にとって A 直売所はどのような魅力があるのかという課題に、生活史インタビューや現場での観察から接近する。

直売所のメンバーは 18 人である。そのうち 30 歳代から 80 歳代の男女 8 人にインタビューを行った。実施期間は、2008 年の 7 月～9 月の間である。インタビューは 1 人につき 40 分から 120 分の間、調査対象者の自宅や直売所付近で行った。直売所の観察では、売り手であるメンバー同士の会話や、売り手と買い手の会話などを中心に記述していった。観察の実施期間は 2008 年の 7 月～8 月の間で合計 9 日間であり、約 40 時間行った。

３．A 直売所の特徴：観察から

１）売り手の直売所に対する意味づけ、２）直売所で売り手や買い手などの間で行われている相互行為、の 2 点に着目し、聞き取りと観察記録の内容に即した分類を行った。

本抄録では２）相互行為について紹介する。この直売所では、売り手と買い手の間で、「教える」「おぼえる」と言われるというやりとりが行われている。その学習内容には野菜や山菜の調理方法、直売所のルール、直売所に集う人々の顔、がある。以下は、野菜や山菜の調理方法を「おぼえる」B さんの語りである。「知り合いの輪は広がったか」という質問について次のように応えた。

B「(略) 向こうさ行けば、あいさつして、世間話して。まぁ、だから、C さんみたいに漬物上手にできる、とか、D さん C さんみたいに山さ行って、フキ採ってくればどういう風にやればアク抜き早く終わるか、とか。そういうの皆、教えてくれるっきゃ。まぁ、こっちで聞くから教えてくれるんだけど、そういうやり方も、加工の仕方もわかってくるっきゃ。山菜とか、漬物とか、どういう風にやればおいしくなるとか。その人の好みは、みんな違うけれども、そっちから聞いたのと、こっちから聞いたのでは、両方やってみて、合わった（自分に合っている）ほうを作ってみるとか。そういう技術的なこともおぼえるっきゃ。」

このような言葉から、A 町の直売所のルールやこの地域に住む人独自の調理方法や加工方法が対面的なやりとりのなかで受け継がれていることがわかる。「教える」「おぼえる」なかで、直売所文化が形成されている。そして、それは個々人の人生をも支えている。

４．生活史から見た直売所

A 直売所は売り手個人の生活史のなかではどのように位置づけられているのだろうか。A さんの事例をみていく。なお、注目すべき個所には下線を引いた。

＜A さん：「自分に合っている場所」＞

昭和 40 年代に、青森県の津軽地域のリンゴ農家に生まれる。義務教育後高校の看護科に入学し、準看護師の資格を得る。正看護師の資格も取るために東京の大学で準看護師として働きながら、勉強をした。しかし、3 年生の時に「遊びすぎて」しまい、正看護師の免許をとることができなかった。諦めきれず、翌年復学するも、学校生活になじめず、結局卒業には至らなかった。その後、準看護師の資格で、数年間働いた。

高校時代の同級生との結婚を機会に青森に戻った。地元の病院やデイケアセンターで数年間働き、辞める。間違っていると思うことでも上司に指示されたらやらなければならないことが辛く、人間関係に疲れてしまった。

6 年前、農協から農地を借りた。種を一袋買って植えてみたら、上手く芽が出て、たくさんの花が咲いた。他の人にも分けたいと思った。A さんは農家ではなかったが、農協に相談し、直売所に参加した。

農家の嫁ではないので、初めは変な目で見られた。先輩の売り手に意見を言われることが嫌だと思うこともあった。しかし、先輩の意見を我慢して聞き、教わった。そのうちに、「A 町の直売所の性質」がわかるようになり、たいしたことはないと思うようになった。

現在勤めている福祉関係の仕事もやりがいはある。しかい直売所のほうがもっとやりがいがあると思う。花を収穫したり、(出荷のため箱に) 詰めているときは、時間があっという間に過ぎてしまう。直売所の収入も多くはなく、大変だけど、仕事が楽しいから続けたい。嬉しいことは、お客さんに自分の花を褒められ、買ってもらえることである。病院でのストレスが原因で不妊になり、悩んでいたのであるが、直売所に参加するようになってから、思いもよらず、長男を授かった。直売所に参加したら、「ストレスが楽しみ」になったので、そのお蔭ではないかと思う。直売所は自分に合っているのではないかと思うようになった。

A さんは直売所では買い手に褒められるのが嬉しいと語っており、他人に認められ、必要とされることに喜びを感じている。自分の正しいと思うことが言えず、間違っていることでも上司の指示に従わなければならないという葛藤の末、仕事を辞めた経験のある A さんにとっての直売所は「自分が認められる」「自分が必要とされる」場所であることがわかる。そして、なかなか授からなかった長男を授かったことをきっかけに、直売所は自分に合っている仕事だとさえ思うようになった。それまで一つの職場に長く勤めていることができなかった A さんが、直売所はやりがいがあるので続けていきたいと語っていることからも、「自分に合っている」場所として直売所にかかわっていることがわかる。

５．「肯定の繰り返し」が行われる直売所

他の対象者の生活史をあわせて一人一人の事例を詳しく見ていくと、売り手にとっての直売所は生活していく上での「生きる喜び」になっていることがわかる。A 町の直売所の売り手は直売所に関して肯定的に捉えている。売り手にとっての直売所はそれぞれの多様な生活史に対応して複合的な意味を持った場所となっている。

金子（1997）は、「生きる喜び」を「生きがい」と呼んでいる。そして、農漁業を営む人は、他人から何かをしてもらうというよりも、自分の手で何かを作り出したり、他人に援助ができるという喜びを感じることができると、述べている。つまり、農漁業を営む人は、それが「生きがい」になりやすい。本研究の事例からは、金子の指摘を支持することができるといえよう。野口（2007）は、売り手にとっての直売所は「否定の繰り返し」の行われる場所であると指摘している。しかし、A 町の直売所の売り手は直売所を肯定的にとらえ、人生に根ざした複合的な喜びを感じながら直売所にかかわっている。A 町の直売所の売り手たちは、直売所に参加することによって 2 重の喜びを得ている。2 重の喜びとは、金子のいうような自分の手で農作物を栽培する喜びと、それを直売所で売ることによって、自由に活動できたり、誰かに必要とされたり、誰かに認められることができるなどといった喜びである。

インタビューや観察などフィールドワークから見た直売所は次のようである。売り手にとって、直売所は、生き生きと積極的にやりとりや販売活動をしながら、仲間との会話を楽しみ、自分の「生きがい」を感じられる場所であった。だからこそ売り手たちはたとえ「否定の繰り返し」や好ましくないことがあっても、直売所に集い続けようとする。売り手にとっての直売所とは、「肯定の繰り返し」が行われる「複合的な意味をもつ場所」である。

６．参考資料・文献一覧

藤目節夫「まちづくりの視点から見た農産物直売所の比較研究－内子町と中山町を事例として－」『人文学論叢第 8 号』愛媛大学人文学会（2006）

金子勇『地域福祉社会学』ミネルヴァ書房（1997）

二木季男『成功するファーマーズマーケット』光の家協会（2000）

野口憲一「農産物直売所の民族誌的研究－「複雑な意味の錯綜する場」としての直売所」『社会学論叢』日本大学社会学会（2007）

農林水産省「第 7 巻　農山村地域調査及び農村集落調査報告書」『2005 年度農林業センサス』http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?bid=000001011999&cycode=0

農林水産省「第 9 巻農業集落調査報告書」『2000 年度世界農林業センサス』
http://www.tdb.maff.go.jp/toukei/a02smenu3?TokID=J106&TokKbn=B&TokID1=J106B2000-001&TokID2=J106B2000-001-007&HNen=H12&Nen=2000#TOP
農政調査委員会『伝統市と地域社会農業：宮城県古川市の八百屋市・日曜朝市の事例』(1991)
総務省統計局「旧市町村に関する集計結果,女別人口及び世帯の種類（2 区分）別世帯数－都道府県，市部，郡部，市町村」総務省統計局ホームページ『平成 17 年国勢調査』(2005)
http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?bid=000001005026&cycode=0
総務省統計局「旧市町村に関する集計結果,産業（大分類），従業上の地位（7 区分），男女別 15 歳以上就業者数－市町村（合併該当市町村）」『平成 17 年国勢調査』総務省統計局ホームページ（2005）
http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?bid=000001005122&cycode=0
靏理恵子「食と農をつなぎ、地域をつくる」『農家女性の社会学』コモンズ（2007）
靏理恵子「「テマ」から「労働の主体」への変化」『農家女性の社会学』コモンズ（2007）